

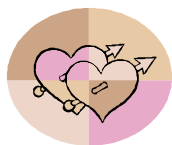
「牛」にまつわるエピソードの数々

十二支では2番目の「丑年」。ところでこの順番はどう決まったのでしょうか。

——子・丑・寅...と続く十二支。その起源には諸説あるが、次のような民話も伝えられている。ある時、神様が動物たちに提案した。「**元日の朝、私の前に姿を見せた順に、年ごとの一番偉い動物にしてやろう**」これを聞いた動物たちは、さっそく競争の準備に取りかかった。牛は自分の歩みが遅いことを知っていたので、他のどの動物よりも早く、大晦日の深夜に出発した。先手必勝、牛は夜明けと同時に神様の住まいに到着した。「**私が一番偉い動物になれる!**」そう思った瞬間、牛の背中に潜んでいたネズミが飛び降り、神様の前に走り出た。哀れ、先を越された牛は2番目になってしまった。お人好し、鈍重など、牛のイメージが伝わってくる言い伝えだ——（「グーグル」から）



もう半世紀以上も前、信州の我が家では角が50センチ以上もある大きな黒牛を飼っていました。田畑の耕作や荷車を引く牛の手綱を私もとった。まだ小学生でした。村にはまだトラックもなく、冬には父が山から切り出した薪を牛が引く荷車で運び出す作業で家計を支えていた。やがて、農業経済の変転に伴い、耕牛（役牛）は乳牛と変わっていきました。



乳牛といえば中学時代で思い出すのは、胸の大きかったクラスの女の子二人です。同級生の悪童が二人にあだ名をつけたのです。色白の一人には「ホルスタイン」、おっぱいのとりわけ大きなもう一人には「ジャージー」と。言い得て妙。晩生だった自分も彼女らをまぶしい思いで眺めていたものです。

現役時代に特派員として世界を訪れていた際もいろんな見聞をしました。熱帯パナマのやせた牛と硬いステーキ。「貧乏人は麦を食え」と言った日本の首相と、わらじよりも大きなステーキで「貧乏人は肉を食え」というアルゼンチンのお国柄。剣のような串に巨大な焼肉を刺したブラジルのシュラスコ料理・・・ところでスペイン語では「雌牛」のことを「**Vaca**」と言いますが、ちょっと漢字、仮名では書きにくいですね。

気になったのはスペインやメキシコの闘牛です。残酷なスポーツに「オーレ、オーレ」とハンカチを振りながら応援する妙齢のセニョリータやセニョーラたち



に、日本的な感情はどうしてもついていけません。スペインでは国技になっていますが、2007年には国営放送が闘牛の生放送を中止、2008年バルセロナでは闘牛の禁止が決定しています。動物愛護の時代の流れでしょうか。自分には暴れ牛に振り落とされないように乗るアメリカの競技ロデオの方が、受け入れられる感じです。

「牛耳る」「牛歩戦術」「九牛の一毛」「鶏口となるも牛後となるなかれ」・・・牛にまつわる言葉や諺のなんとなく後ろ向きのイメージはモー結構。仏教では、火宅から走り出し、煩惱の炎から救われる「三車火宅の譬え」の中の「牛車(菩薩)」とか、最高の仏の境地「大白牛車」とか、とても前向きにとらえています。さてさてシニアは「牛歩」でもOK。今年もまた人生の峰へと着実に「前進」していきたいものです。